

國學院大學學術情報リポジトリ

落窪物語論：形見の機能を中心として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-22 キーワード (Ja): 『落窪物語』, 形見, 鏡箱, 櫛箱, 機能 キーワード (En): 作成者: 菊池, 莉奈 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001653

論 文 要 旨

学籍番号	233202	氏 名	菊池 莉奈
論文題目： 落窪物語論—形見の機能を中心として—			
(内容の要旨) 本論文は、『落窪物語』の形見に焦点を当て、物語における形見の機能について明らかにすることを目的とする。形見とは、前持主との思い出を紡ぎ、時として過去を思い出させる物である。それは文学作品のなかで超越した「物」として機能的に用いられる。『落窪物語』においても、落窪の君が母君から受け継いだ形見の品がいくつも登場するが、なかでも鏡箱と櫛箱は重要な物語の展開部分で用いられ、落窪の君によって機能的に用いられていることが考えられる。そのため、本論文では様々な作品を辿り、その物語的意義を明らかにすることで、『落窪物語』における鏡箱と櫛箱の機能について考察することを論の主たる対象とした。 第一章では、落窪の君が継母へ鏡箱を返還する場面を対象とし、落窪の君が鏡箱に書いた和歌と、「鏡の敷きを押し返して書き給ふ」行為に着目した。落窪の君は鏡箱の返還に際して鏡箱を用いることで、虐待に対する復讐として、鏡箱に書かれた和歌と行為を通し、継母を呪うものとして機能していることを論じた。 第二章では、落窪の君から多くの物を奪っていた継母が、落窪の君の櫛箱を欲しがるものの奪うことができなかった場面を対象とし、落窪の君と櫛箱の密接な関係に着目した。『落窪物語』では、いくつもの形見の品が登場するなかで、継母が奪えない物として櫛箱が用いられた。櫛箱は女性の持ち物のなかで最も欠かせない物であり、物語内で落窪の君と密接に関わることで、櫛箱が落窪の君自身を象徴し、そこに力が秘められることから、櫛箱が落窪の君を幸福へ導くものとして機能していることを論じた。 以上の考察を通し、『落窪物語』における鏡箱と櫛箱は単なる形見として語られているのではなく、鏡箱は継母を呪い、櫛箱は落窪の君を幸福へと導くものとして、機能的に用いられていることを明らかにした。(757 字)			
キーワード (5 語)			
『落窪物語』 形見 鏡箱 櫛箱 機能			